

<「知るっぱ！久留米」 令和4年3月3日（木） 12：30～放送分>

鳥類センターの魅力 ～第1回～ 「鳥類センターってどんなところ？」

<ゲスト：久留米市鳥類センター 高山しのぶさん>

坂本 MC（以下「坂本」）

「知るっぱ久留米」ナビゲーターの坂本豊信です！

今回は、久留米市の人気スポット『鳥類センターの魅力』をテーマにお送りします。

ゲストはこの方です。

ゲスト：高山さん(以下「高山」)

こんにちは！久留米市鳥類センターの高山しのぶです。

よろしくお願いします。

坂本 1回目の今回は、知っているようで実は知らない『鳥類センターってどんなところ？』

というテーマでお送りします。

まずは、鳥類センターの中にある施設について伺っていきます。

鳥類センターといえば、クジャクのイメージですが、中にはどんなものがあるのですか？

高山 鳥類センターは、およそ3万平米の敷地内に鳥たちを展示するエリアと、

観覧車がシンボルの遊園地エリアがあります。

鳥たちは、令和3年12月現在で75種、371羽が飼育されています。

また、鳥だけでなく、ヤギやウサギ、タヌキ、キツネなどの動物たちもいるんですよ。

子どもたちには、観覧車やスカイサイクルなどの遊具が人気です。

そして、入り口に展示されているSLは、60年程前まで九州で走行していた

D51型の蒸気機関車で、1974年に国鉄から寄贈され、間もなく50年になります。

坂本 鳥だけじゃなくて、いろんな動物もいるんですね。

遊園地エリアは小さなお子さんと安心して楽しめるので、

子どもの頃に行ったという方がラジオの前にもたくさんいらっしゃると思います。

我が家も男の子が2人いまして、よく遊びに行きました。

2人とも成人しましたが、覚えてくれているかなあ。

鳥をメインに展示や飼育をしている施設は、全国的にも珍しいのではないですか？

高山 そうなんです。鳥をメインにした動物園は、全国で3か所しかなくとても貴重です。

坂本 そんな貴重なスポットが、久留米の身近な場所にあるのはありがたいですね。
ちなみに、70種類近い鳥たちが一緒にいるとそれぞれの生活リズムもバラバラだと思いますが、
来園する皆さんにおすすめの時間帯はありますか？

高山 そうですね、鳥は主に日中に活動しますが、フクロウのように夜行性の鳥もいます。
鳥類センターで人気のクジャクは、比較的羽根を広げていることが多い午前中、
ペリカンは昼の1時~2時頃、ペンギンは夕方3時頃のえさの時間には、
食事中的の活動的な姿をご覧いただけるとと思いますよ！

坂本 鳥にもそれぞれの生活リズムがあっておもしろいですよね。
会いたい鳥が活発に動いていたり、食事タイムの時だったりを狙って見るといいのかなと思います。
春夏秋冬のリズムもあると思いますが、おすすめの季節はありますか？

高山 やはり、おすすめは春先から夏にかけてですね。
卵からかえったヒナが親鳥と過ごしている姿を見ることができ、
とても微笑ましい気持ちになります。
熱心に子育てをしている姿を見ると、鳥も人間も変わらないなと思わされます。
また、春はクジャクが美しく羽を広げる求愛行動なども見ることができたり、
夏は水浴びや羽でバタバタとおおぐ姿なども見られます。
季節によって動物たちの行動も変わるので、1年を通してご覧いただくと生態が分かって、
鳥類センターをディープに楽しめますよ。

坂本 鳥好きにはたまらない場所ですね。
季節ごとに園内の雰囲気が変わるのもいいですね。
さて、続いては鳥類センターの歴史について伺っていきます。
鳥類センターはいつごろ開園したんですか？

高山 鳥類センターには、前身となった久留米市動物園が、三本松公園にありました。
開園したのは戦争が終わってから間もない昭和29年で、
子供たちのために動物園を作ろうとした皆さんの奉仕活動がきっかけとなりました。
当時の久留米市動物園に最初にやってきたのは、八女市黒木町からのムササビだったそうです。
その後も市民レベルの寄付で動物たちが集まり、開園時には25種77頭の動物が展示されました。
開園したのがちょうど昭和29年の元日で、三が日の間に7万5,000人を超す入園者がやってきて、
久留米市街地に長蛇の列ができたそうです。

坂本 私は昭和33年の生まれなので、それこそ小学校に上がる前からよく連れて行ってもらいましたね。
今思うと、街の真ん中に動物園があったのもすごかったですし、
覚えているのは、ガチョウとかクジャクは放し飼いに近い状態でした。
幼稚園に上がる前の私が、ガチョウに追いかけて泣きべそをかいた白黒のスナップが

アルバムに残っています。(笑)

高山 また、開園した年の12月に東京の上野動物園にムササビが贈られ、
上野動物園からはクジャクのつがいがやってきました。
これをきっかけに、久留米市ではクジャクの一大繁殖作戦が展開されるようになっていきました。

坂本 まさに、クジャクのアダムとイブというね。確か「久留米の千羽クジャク」として有名でしたね。

高山 やってきた2羽のクジャクは、野中町の孵化(ふか)場で次々に数を増やし、
8年目には一千羽に到達したことで「日本一のクジャク園」となり、
久留米市のクジャクは全国的に有名となりました。

坂本 クジャクが羽を広げた姿がとてもきれいだったと、子ども心ながら覚えていますね。
さすがに、三本松公園では手狭だったでしょうから、今の場所に移転になるんですね。

高山 現在の東櫛原町に移転したのは、開園から16年後の1970年(昭和45年)でした。
友好都市となっている中国の合肥市からタンチョウを譲り受け、繁殖を行いました。
その後も展示数が増えていき、鳥だけでなく哺乳(ほにゅう)類、爬虫(はちゅう)類も加わって、
今に至っています。

坂本 三本松公園の時代に比べると、広く見やすくなって、動物たちは快適に過ごせているでしょうね。
私が小学生の頃に今の場所に開園したので、中央公園も完成してないころですかね。
護国神社でバスを降りて、レンコン掘りの畔(あぜ)を延々と歩いて行った記憶がありますね。
懐かしいなあ。・・・などと懐かしんでいるうちに時間が来てしまいました。
今回は『鳥類センターの魅力』の1回目。
『鳥類センターの施設と歴史』をテーマにお聞きしてきました。
高山さん、ありがとうございました。
次回は、鳥類センターの顔『クジャクのひみつ』をテーマにお送りします。
お楽しみに!